

皇帝

古名

明王鏡

同

玄宗

觀世小次郎作

季は	地は	後	前
春	唐土	ツレ 鬼	ワキ 玄宗皇帝
		シテ 鐘馗	シテ 老翁

子方 楊貴妃

ワキヅレ（大臣）官人

「春は春遊に入つて夜は夜を専とし。後宮の佳麗

三千人。三千の寵愛一身に在り。かく類なき貴妃

の紅色。芙蓉の紅色かへて。未央の柳の力もなし。

地「たゞよわく」と伏柴の。露の命もいかならん。心

づくしの春の夜の。く。木の間の月も朧にて。

雲井に帰る雁金も。我如くにや鳴き渡る。霞の内の樺桜。ひとへに惜しき姿かな。く。

シテ詞「如何に奏聞申すべき事の候。

「不思議やな宮中しづまり物さびて。心を澄ます折節に。御階の下に来るを見れば。さも不思議なる老人なり。そも汝はいかなる者ぞ。

シテ「是は伯父の御時に。鍾馗と云ひし者なりしが。及第叶はぬ事を歎き。玉階にて頭を打ち碎き。身を徒になしゝ者の。亡心是まで參りたり。

ワキ「実にさる事を聞きしなり。其まゝ都の内にをさめ。

贈官せられし大臣の。其亡心は何の為め。唯今こゝ

に来れるぞ。

シテ  
「実によく知ろし召されたり。贈官のみか緑袍を。  
死骸に蒙る旧恩に。今かく君の寵愛し給ふ。貴妃  
の病ふを平らげて。奇特を見せしめ申すべし。然  
らば件の明王鏡を。彼御枕に立て置き給はゞ。必  
ず姿を顯はさんと。

地 「直奏かたく申し上げ。く。我通力を起しつゝ。

楊貴妃の花の姿。誘ふ風を静めんと。申しもあへ

ず其姿。御階の下に失せにけり。く。

(申入)

ワキ詞  
「いかに貴妃。今日はいつしか曇る日の。暮るゝ夕  
べも朧月夜の。晴れぬ心は如何なるぞ。

貴妃  
「實にや衣を取り枕を推すべき力もなく。苦しき心  
にせきかぬる。涙の露の玉髪。かゝる姿は恥かし  
や。

ワキ  
「かはるにかはる物ならば。かく苦しみを見るべき  
かと。力を添へて木綿四手の。

貴妃

「髪をも上げず。

ワキ

「ひれふすや。

地 「翠翹金雀とりぐに。かざしの花もうつろふや。

枕波の斜紅の。世に類なき姿かな。實にや春雨の。風に従ふ海棠の。眠れる花の如くなり。

クセ

「然るに明皇。栄花を極め世を保ち。色を重んじ給ふ故。類なき貴妃に斯く。契りをこめて年月の。春宵短きを苦しみて。日高く起き出で。朝政も絶

えぐに。移る方なき中なれど。

ワキ

「遁れ難しや世の中は。

地

「思はぬ障り有明の。月の都の舞楽まで。学び残せる方もなく。秘曲伝へし笛竹の。寿なれや此契り。天長く地久しくて。尽くる時もあるまじ。

「実に今思ひ出だしたり。彼老人の教への如く。明

王鏡を取り出だし。彼御枕に置くべきなり。

大臣 「勅諫尤然るべしと。月卿雲客一同に。明王鏡を取

ワキ詞

り出だし。御枕近き御几帳に。立て添へてこそ置きたりけれ。

地「かくて暮れ行く雲の足。く。漂ふ風も冷ましく。身の毛もよだつ折節に。不思議や鏡の其内に。鬼神の姿ぞうつりける。

地「九華の帳を押し除けて。く。彼御枕により竹の笛をおつ取りさし上げて。勇み喜ぶ其氣色。鏡にうつり見えければ。帝は是を叡覧あつて。さては病鬼よ遁さじと。剣を抜いて立ち給へば。天に上り地に又下り。飛行自在を顕はして。帝に向ひ怒りをなせば。剣を振り上げ切り給へば。御殿の柱に立ち隠れて。姿も見えず失せにけり。

ワキ「不思議や曇る空晴れて。宮中光りかゝやきて。地「鳴動するこそ恐ろしけれ。

後ジテ「そもそも是は。武徳年中に贈官せられし。鍾馗大臣の精靈なり。

詞

「さても此君寵愛し給ふ。貴妃の病ふを平らげん  
と。通力を以て奇瑞を見す。南無天形星王我剣降  
鬼と。秘文を称へ駒に乘じ。虚空を翔つて参内せ  
り。

地  
「悪鬼は是を見るよりも。く。驚きさわぎ。彼  
真木柱に隠れけるを。鍾馗の精靈馬よりおり立  
ち。利剣を引つ提げ袂をかざし。明王鏡に向ひ給  
へば。鬼神の姿は隠れもなし。

鬼神

「鬼神は通力自在も失せて。

地  
「鬼神は通力自在も失せて。起きつ転びつ走り出づ  
るを。追つゝめ給へば御殿を飛びおり。六宮の玉  
階に走り上るを。遁さじ物をと引き下し。利剣  
を振り上げずたゞに切り放し。庭上に投げ捨て  
忽に。貴妃も息災なほ此君の。恵みを仰ぎ。守り  
の神となるべしと。玉体を挙し奉り。玉体を挙し  
奉りて。姿は夢とぞなりにける。

底本 .. 国立国会図書館デジタルコレクション  
『譜曲評釈 第五輯』 大和田建樹 著